

農閑期の直まき全国へ



播種機を使い冬の田んぼにコメの種もみをまく農業者。春の作業を農閑期に分散することで、生産規模の拡大につなげられる＝八幡平市

岩手大グループが研究

直まき栽培は育てた苗を水田に移植する従来の方法に対し、田んぼに直接種をまく。春の直まきは例があるが、同学部の下野裕之教授(作物学)は初冬に種をまき、雪の下で越冬させる技術の実用化に向けた研究に2008年に着手。繁忙期の春の作業を避けられ、育苗や移植にかかるコストも減らせる。

新たな技術の確立と全国展開を目指すのは、九州まで適応可能な「いつでも直播だ」。「初冬直まき」を応用し、種まきの時季を早春まで拡大。暖かい地域での初冬直まきは春を待たずに発芽してしまう課題があり、水分の吸収を防ぎ出芽率を安定させる新たな種子コーティングや、環境負荷を軽くできる除草の技術開発などに取り組んでいる。

研究には北海道から九州まで20の大学・公的研究機関が参画し、13の生産者の協力も得られた。生物系特定産業技術研究支援センターのオンライン・ベースション研究・実用化推進事業に採択され、28年

初冬対応の稲作技術応用 温暖地域に普及目指す

度までの5年間で1億5千万円の支援を受ける。

初冬直まきは普及が進み、導入経営体は15年に青森県の1法人だったが24年には本県や北海道、新潟など7道県の22法人に拡大した。下野教授が設立し、事例を共有する研究会の会員は24年1月の219人から12月に326人に増えた。

48畝の水田を営む八幡平市野駄の「かきのう」は今年、10畝で実践。離農者が増えて引き受ける農地が大きくなったが「作期を分散することで面積を拡大できる。収量面も悪くない」と立柳慎光代表取締役。実際、10畝当たり690㍓を収穫でき、春に通常の田植えをした際より90㍓上回った年もあったという。

コメの生産現場は転換期を迎えている。高齢化や後継者不足による離農が全国的な課題で、大規模経営体の農地集積が進む。農林業センサスによると、東北の1経営体当たりの面積は20年が2.92㍓と、5年から1.9倍になった。ただ離農のペースが速く、大規模経営体でも農地を受けきれなくなる可能性がある。下野教授は「春の作業だけでカバーできる面積は限られる。規模拡大を後押しし、経営の安定化に貢献できる技術を実現したい」と話す。

☐ コメの初冬直まき栽培 春に苗を移植する手法とは違い、初冬に直接種をまき、雪の下で越冬させて春に発芽させる技術。岩手大の下野裕之教授が全国の研究機関と連携して▽種子消毒剤で種子をコーティング▽種まきの深度は1〜2号が望ましい▽など実用化に向けて技術の精度を高めてきた。寒冷地で既に導入され、温暖な地域での普及を目指す研究を進める。

※岩手日報 令和6年12月31日付

※岩手日報社の許諾を得て転載しています